

全校集会(10月10日<絆を強める>)

皆さんには、「腹を割って話せる先生がいますか」、「自分の気持ちを理解して、自分のことを真剣に考えてくれる先生がいますか」、「少なくとも一人以上いますか」、どうでしょうか。

私は、生徒の皆さんが仲間関係を深め、この西中で一生の友達をたくさんつくってほしいと思っていますが、それと同じくらいに先生との関係も深めてほしいと思っています。先生も努力しますが、皆さんの努力も大切です。人間関係は、どちらか一方の努力だけで深まるものではありません。お互いが努力しなければなりません。親子の関係だって、兄弟の関係だって同じです。

あと何年もしないで、皆さんは皆成人になってしまいます。時には、先生と酒を酌み交わすことがあるかもしれませんが。そんな機会には、思い出話に花を咲かせるような関係であってほしいものです。腹を割って話せる先生を一人以上つくってほしいと思います。

私は大人と同様に、小学生や中学生、高校生にも手抜きせず、また、無礼な剣道をしないよう心がけています。そして、打たれたら頭を下げるようにしています。生徒というより、剣の道を追求する仲間という思いで、昔のような強くするという考えではなく、剣道のおもしろさを伝えたい、共に味わいたいという思いで稽古しています。教師も生徒も、今をこの西中で過ごし、めざす方向を同じくする間柄との意識はどこかにあってほしいものです。

挨拶が良くできる学校に

生徒会が企画して行う挨拶運動は、どこの学校でも見られることかと思いますが、保護者と教職員が一緒に行う西中のような挨拶運動は、少ないのではないかと思います。このような特色ある取り組みが大いに成果を上げるよう期待しています。

挨拶を含めた礼儀作法は、人間関係を発展させるばかりでなく、物事を成就させる源と考えています。礼儀作法のできない人は、生き方の基本ができていないのですから、何をやっても成功させることはできないでしょう。

20年以上も前になりますが、ある学校に転勤した時、挨拶ができないのに驚いたことがあります。そこで、下都賀のある学校に、部活動の学校交流をお願いしました。バスを何台も連ねて出かけましたが、あまりの礼儀正しさに生徒も職員も、「世の中にこんな学校があったのか」と、衝撃を受けたようです。それから学校は大きく変わり出しました。挨拶が日増しに良くできるようになりました。もちろんそれだけではありません。挨拶(こんにちは、おはようございます、さようなら、ありがとうございます、失礼します...)や返事の練習が行われるようになりました。

私は、校門をくぐった人には誰にでも(濼びだって)挨拶を、人影を見たら挨拶、練習を中断しても挨拶、とかなり乱暴な指導をしました。学校でできるようになったら、近所の人、交通指導員、知り合いなどに積極的に挨拶できるようになってもらいたいし、そうやって本物と考えています。

立会演説会(10月14日<みんなのために>)

私の知り合いで、市議会議員をしている人がいます。市議会議員になる前は、国会議員の秘書をしていました。秘書になった理由は、日本を変えるには、国会議員になることが近道、そのためには国会議員の秘書、それも有力議員の秘書となって学ぶことが重要と考えたとのことでした。自分のことより国のことを考えている姿に、若いのに立派だと感じています。

さて、立候補者の意見を読ませてもらいましたが、皆が私の知り合いと同様、みんなのために、学校のために、との姿勢が貫かれており、とても頼もしく感じました。西中生全員が立候補者のように考えたら、西中はたちまち変わると思います。

今の日本には、自分のことばかり考える人が多過ぎる、利己主義がはびこっていると感じています。人間は、自分が皆さんの役に立っていると自覚した時、真の喜びを感じるものと思います。自分のためでなく、自分以外の人のためにとの考えや行動が当たり前の中になることを期待しています。

「他人を大切にできる(できない)人は、自分を大切にできる(できない)」と考えれば、正されることも多いでしょう。まず自分との考えが利己主義をはびこらせていると考えています。「人の命は地球より重い」、何度か耳にしたことがあります。人の命は確かに大切です。かけがえのないものであると思います。しかし私は、自分の命が地球そのもの、地球上の全人類、動植物、文化遺産等より大切とは思えません。

世の中に闘いを挑みませんか

本校の携帯電話所持率は、62.5%(昨年7割)でした。40%程の中学校も市内にはありますので、本校はかなりの高率です。

職業人でもない中学生に、携帯電話は必要ないと考えていても、抗しきれずに与えてしまうのでしょ。う。「子どもを非行にする10箇条」には、「子ども部屋に電話を設置することは、子どもを非行にする理想的な環境」との記述がある。親に知られずに外部と連絡を取ることができるし、居ながらにしていろいろな情報が収集できるからである。携帯電話を与えることは、子ども部屋の電話以上に子どもを非行にする環境を提供することになる。

石原慎太郎東京都知事は、教育委員との懇談会の折、「久しぶりにヨーロッパに長期滞在したが、どの国においても、中学生や高校生の年齢の子どもが、携帯電話を持っているのを見かけなかった。知人に聞いてみると、価格からしても、その料金(燃料)からしても、与えられる小遣いでまかなえるものではなく、当たり前だ」と言われたという話を聞いたのだそうです。私も3年前、青少年訪米団としてスプリングフィールド市を訪れましたが、日本のような光景(食べながら、歩きながら、自転車に乗りながらの携帯電話など)は見かけませんでした。

片時も携帯電話を手放せない異常な実態や携帯電話を持ったがための悲しい結果に、嘆き苦しむ生徒や保護者が少なからずいることを思うと、手をこまねていることはできません。何年かかるか分かりませんが、携帯電話所持率0%を目指して行動を起こしたいものです。教師の我々がやらなくて誰がやるのでしょうか。鉄の意志をもってすれば、何とかなるはずで